

説教 「聖なる逆転を」 ローマ5:12-21 2023.7.2

仙川教会代務者、ユーカリが丘教会主任担任教師 大串 眞

先週ユーカリが丘教会では、3年越しのチャペルコンサートがいよいよ実現となりました。とても祝福された会となりました。また、その翌日は千葉支区伝道協議会がありまして、そこで、ユーカリが丘教会の信徒の方が発題をされました。本日はその時のレジメのプリントを配りました。「試練の中でこそ教会は成長させていただく」と題しての証しでした。コロナ禍の中で、様々な活動の制限がありました。人が集まる礼拝や集会を続けることも困難が伴いました。精神的な苦痛もありました。いろんなことがあって、いわばピンチでしたのに、そして、この教会はピンチの連続、試練の連続なのに、不思議に支えられて参りました。不思議なことに、ピンチをチャンスに変えてたくましく歩いて参りました。そして、なんと教勢という点でも、財政という点でも、必要を満たされて参りました。活動の幅が広がりました。人と人とのつながりもかえって強く広くされて導かれて参りました。まるで、苦難があったからこそ、試練があったからこそ、成長させていただいたというのが、実感ということです。

説教題に「聖なる逆転を」とつけました。聖なる逆転がある。教会生活をしていると、信仰生活をしていると、聖なる逆転とも言えることが本当に起こってくるのです。

さて、今日の聖書に入っていく前にもうひとつのことをお話します。今、ユーカリが丘教会は、「北総がんカフェ」というものをしています。教会の活動とは一応区別している活動なのですが、それでいて、教会としても、この活動を支援してくださる形で行っています。教会が地域との接点となる場となることを願ってのことです。そして、わたしは、一応、「北総がんカフェ」の代表であってスタッフの一員ということで、いろいろな場所で行われるがんカフェにも顔を出しています。そして、いろんな方と出会うのです。いろんな方のそれぞれ置かれたところでの話を伺います。中には深刻な中身もあります。信頼できる仲間であるから、安心して深い話をしてくださるのです。「がん」の話だけでないのです。人生の様々な苦難が話題になります。しかし、ただ人生は厳しいとか、辛くて大変なことばかりあるというのではなくて、そういう中で、現実をうけいれて、なんとか前向きに生きていこうという人々の話を聞けるのです。「病気であっても病人」ではないとか、「人生いばらの道、されど宴会」という前向きの言葉、これらは主宰者の樋野興夫先生の言葉の処方箋という言葉なのですが、そういう言葉や生き方から、多くを学んだり、元気をもらうのです。

さて、先日、ある会で、今、お話しした言葉の処方箋が話題となりました。「人生いばらの道、されど宴会」という言葉の処方箋がその日のテーマでした。この言葉は、がんカフェの中でよく耳にする言葉です。これ、わかるようで、なかなかわからない。どういう意味なのでしょう。人生がいばらの道だとはよくわかる。でもどうしてそれが、逆転して、「されど宴会」になる。それはどうしてですか。どうやったらそういう心境になれるのですか。率直な問題提起を参加者がされました。なかなか深い問いかけだなと心に残りました。これを語った樋野興夫先生はクリスチャンです。これはクリスチャンだから、言える言葉ではないかなと後で、私は思い返していました。なぜなら聖書がその逆転を語っているからです。

今日の箇所。ローマ5:12-21は、その「聖なる逆転」が語られているのです。

さて、5:12~に入っていく前に、前回の時のことを思い返してみましよう。それは、5:1-11「神と和解した人生を」でした。恵みと恵みのサンドイッチに挟まれたわたしたちの歩み、それは、苦難の現実をも、前向きにとらえることができる平和でした。堅く望みに立って歩むことがで

きる。キリスト者としての確信。動かされない平和だったのです。とても、ありがたい言葉でしたね。

しかし、この12節から、角度がまったくかわってしまって、別の話をもってきたかのような印象を受けます。いきなり話題が変わってしまって、なんだか壮大なスケールの救済の歴史が話題になったかのようにです。しかしわたしは、ここは別のことを言っているのではないと思っています。つまり、わたしたちは、恵まれています。神との和解を受けて、ハッピーですと言っているところで、問いが起こってきているのです。

「人生いばらの道」ってどういうことなんでしょうか。そして、それが逆転して、「されど宴会」と逆転していくってどういうことなのか。そういう深い問いに答えているように響いてきます。

人生がいばらの道ってなぜか。それは、使徒パウロは、旧約聖書の創世記の最初の人間アダムから説き起こしていきます。ここでの話は創世記3章に書かれていることが前提になっています。それは、最初の人間が罪を犯してしまったことから、罪が人類に入り込んだという話です。そして、その結果、人は死ぬことになった。人というのが、そもそも、この罪と死の支配の下にあるという話をしていきます。それは、あの罪、この罪という数えられる罪のことではなくて、原罪といいます。オリジナルシンというものです。

結局、わたしたちの人生の道がいばらの道であるとはこういうところに原因があるのだ、聖書はそのことをわたしたちに語っているのです。これはあの人のこういうところが悪い、この人のこういう罪が悪い、そして、自分にもこういう悪いところがあるという数えられるものではないのです。相対的に並べて評価できるということでもありません。もっと深いところに根があって、人はほっておくと誰もが、その方向に落ちていってしまうものをあらわしています。

人は死ななくてはならない。それが、わたしたちが生きていく中で、人生において確実にあることです。中世の修道院の入り口にあった言葉は「メメントモリ」人は必ず死ななければならないという言葉です。ペストという疫病でたくさんの人が亡くなった時代でした。人は死ななくてはならない、いつか必ず死ぬのです。そしてそこに向かうところの病や老い、それこそ、二人に一人が「がん」、三人に一人が認知症です。老いて弱さを覚えること。病や、認知症など、だんだん心もとなくなってしまうこと。そういうことを通り過ぎなくてはならないというのです。それが、死という現実です。

そして、それだけじゃない。罪の支配の中にあるということも、わたしたちの人生がいばらであることと関係しています。みなさん、だからわたしたちは、生きづらいのです。死に向かって老いや病いや、弱さがいろんな問題があります。しかし、その中で、生き方を暗くすること。それはわたしたちが、自分の心を本当の意味でコントロールできないことにあります。いろんな苦難があっても、それを前向きに、切り替えて受けとめていきたいと思う。いろんなつらいことがあっても、明るく、希望を失わずに歩みたく願う。しかし、わたしのこころの中に、何か問題があって、なかなかそのように、気持ちを切り替えていくことができない。それが、ここで罪の支配と言っていることです。だから人生は本当にいばらの道なのです。具体的ないろいろな苦難とか、問題だとか、それだけじゃない自分が罪のゆえに、引きずっているものがあるのです。それが人生がいばらの道である理由です。

しかし、ここに、逆転が起こってきます。今日の箇所の後半には、イエス・キリストによる逆転が語られていますここからのところは、大きく。前半部分は、アダムを頂点にするピラミッ

ドがイメージされています。このピラミッドの頂点のアダムから、全人類に罪と死が広がっていくという図があるとします。

後半部分にも、あるピラミッドがあります。その頂点はイエス・キリストです。でも、このピラミッドは、逆さまで、地面のどん底に、ピラミッドが入っている。いや、お椀が地面に埋まっていて、そのどん底、頂点に十字架が立っていると思ってください。パウロは、アダムによるピラミッドと、キリストによるピラミッドを比べて並べています。後半は逆ピラミッドです。一番下のキリストがいます。このイエス・キリストによって、人生いばらの道が、されど宴会に逆転します。

パウロは、アダムのピラミッドとキリストのピラミッドを比較して、キリストによって、罪と死のいばらの道が、ゆるしと復活のいのちに代わっていく逆転を語っています。その言葉は、興奮ぎみに、高揚して、後者の圧倒的な恵みの勝利を語っていきます。そういう筆の勢いというものをぜひ感じてください。

15 節「しかし恵みの賜物は罪とは比較になりません。一人の罪によって多くの人が死ぬことになったとすれば、なおさら神の恵みと一人の人イエス・キリストの恵みの賜物とは多くの人に豊かに注がれるのです。」

17 節にも「なおさら」と強調されています。比較にならない。圧倒的に後半の恵みの場合が勝利していくというのです。比較しつつも圧倒的に後者の影響は全人類に及ぶのです。

特に 20 節は力が入っています。アダムとキリストの間に、救済の歴史の真ん中には、モーセによって神から律法という規準を授かったことが、記されています。この律法は、神様が望まれる方向を指し示すと同時に、そのことでかえって人間の反逆、つまり罪が浮き彫りになって行きました。「律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでした。しかし、罪が増したところには、恵みがなおいっそう満ち溢れました。こうして罪が死にあって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです。」

ここには、聖なる逆転があるのです。わたしたちの側としては、先ほど前半で触れましたように、罪と死の支配によって人生のいばらを感じるのです。生きにくい現実、重い現実に悩むのです。しかし、このように思えば思うほど、十字架のイエスのもとに導かれるのです。そしてそこから復活の命に導かれていくのです。

最後に、今申し上げた聖なる逆転をあらわす一つの証しをしたいと思います。

その人は仙川教会に関係しています。すでに召されていますのでお名前をいいます。池田雅美さんという方です。私が小学生から中学生になる頃、仙川教会のCS、教会学校、今では子ども教会といえます。子どもたちが教会にわんさか集まっていた時代でした。中学生、高校生になるとバイブルスクールといって、春や夏に聖書の学びを中心とする合宿がありました。わたしたちにとっては聖書の学び以上に、楽しくてしょうがなかったのです。池田雅美さんは、早稲田大学の学生さんでYMCAにも出入りをしていたので、子どもを遊ばせるのが上手でした。わたしは小学6年生か、中一の頃、参加して、池田さんをリーダーとするグループで、友達とふざけあって少しも真面目に取り組まないという状態でした。池田さんは特に怒ることなく、わたしたちと付き合ってくださいなのですが、そのクラスの最後の時に、今までの違った顔つきで、真剣に言われたのです。「君たちにこのことだけは覚えておいてほしい。これからの人生で君たちがいろいろと困難な目に遭うときが来る。それこそどん底を経験するだろう。」

奈落の底に突き落とされる時が来るだろう。しかし、そのどん底の一番下に十字架が立っているのだ。その十字架から何度も何度も立ち上がらされていく。それが復活ということだ。」正確ではないけれどそんなことをおっしゃったのです。わたしは、この時のことをずっと心に残り続けていったのですね。

池田さんは、その後就職されて、結婚されて、離婚もされましたが、再婚されて幸せに暮らしていたことを風の便りで伝わってきました。ところが、まだ40代だったでしょうか。白血病を患ったということをお聞きしました。その頃の白血病は治療が難しかったということかもしれません。雅美さんは帰らぬ人となってしまったのです。わたしはその時四国に赴任していたので、池田さんの葬儀には出ることはできなかったのですが、ご両親宛てに手紙を出したのです。雅美さんが、私が教会学校の生徒だったとき、こんなことを話されたのです。雅美さんのその後の生涯においても、きっと、いや必ず、どん底に立つ十字架によって支えられたことと信じます。ご両親はその後、わたしか千葉で開拓伝道をするときに、同じ教会のメンバーとなってくださったので、この時のことを何度も振り返って確認されたのです。池田太郎さんは、この話はボトム、底という名前をつけて愛してくださいました。ボトム、ボトムと合言葉のように語っていたのです。

みなさん、このボトム、どん底に立つ十字架こそが、人類の希望です。そして、聖なる逆転の場所なのです。わたしたちが逆ピラミッド、蟻地獄の底に落ちていく蟻のように、罪と死の支配で落ちていく。しかし、どん底に立つ十字架によって、そこにいます主イエス・キリストによって、ゆるしに生かされる。そして、立ち上がらされる。蟻地獄という虫をご存知ですか。私は子どもの頃虫が好きでしたが、この蟻地獄もよく観察しました。たいてい軒下に円錐形の蟻地獄がいくつもありました。蚊にさされながらよく観察していました。残酷なんです。生きた蟻をわざと落とすのです。蟻はかわいそうに蟻地獄の底に落ちていくのです。蟻地獄は体液を吸った蟻を蟻の外にポーンと投げ出すのです。それと同じように、わたしたちも、穴の外にポーンと投げ出される。そして新しく立ちあがるのです。永遠のいのち、復活のいのちに満たされて何度でも立ち上がるのです。

みなさん、だから、わたしたちは、聖なる逆転に与って、どんな困難な現実があろうとも、どんなに試練の中にあろうともここから立ち上がることができるのです。

「人生はいばらの道、されど宴会」聖なる逆転はある。祈りましょう。